

〔權記〕寛弘八年五月廿七日庚子、雖有所勞無便籠居、相扶參內、有召候御前、仰云、可讓位之由一定已成、一親王○敦事可如何哉、即奏云、此皇子事所思食歎尤可然、抑忠仁公○貞房原寛大長者也、昔水尾天皇○和清者、文德天皇第四子也、天皇愛姬紀氏所產第一皇子○喬惟依其母愛亦被優寵、帝有以正嫡令嗣皇統之志、然而第四皇子仁惟以外祖父忠仁公朝家重臣之故、遂得爲儲貳、今左大臣○藤原道長者、亦當今重臣、外戚其人也、以外孫第二皇子○後定應欲爲儲宮、尤可然也、今聖上○一雖欲以嫡爲儲、丞相未必早承引、當有御惱之時代忽變、事若噭々、如不得弓矢之者、於議無益、徒不可令勞神襟、仁和先帝○光依有皇運、雖及老年、遂登帝位、恒貞親王始備儲貳、終被棄置、前代得失略以如此、如此大事、只任宗廟社稷之神、非敢人力之所及者也、但故皇后宮后定子○敦康母外戚高氏○高階之先、依齋宮之事、爲其後胤之者皆以不和也、今爲皇子、非無所怖、能可被祈謝大神、猶有愛憐之御意、給年官年爵并年給受領之吏等、令一兩宮臣得恪勤之便、是上計也者、是亦自去春來、每有雍容所被仰、亦所上奏之旨耳、卽重勅曰、汝以此旨仰左大臣哉如何、即奏曰、左右可隨仰、但如此之事、以御意旨、面可賜仰事歎、因有天許、未參御前之間、於大盤所邊、女房等有悲泣之聲、驚問兵衛典侍云、御惱雖非殊重、忽可有時代之變云云、仍女官悲歎也、此間主上出御畫御座蒙仰、仰以有難忍之事等、今朝左大臣參東宮○三被申御讓位案内云云、此事自昨所發也云云○略

〔榮花物語石蔭〕かくて御かど一條、一いかでおりさせ給なんとのみおぼしのたまはすれど○中いままはかくておりぬなむとおぼすをさるべきさまにおきて給へとおぼせらるれば、殿道長○藤原うけたまはらせ給て、東宮に御たいめんこそは例の事なれど、思しあきてさせ給程に、春宮には、一宮○敦をとこそおぼしめすらめと、中宮の御心のうちにもおぼしあきてさせ給へるに、うへおはしまして、東宮の御たいめいそがせ給に、世人いかなべいことにかとゆかし申思ふに、一宮の御かたさまの人々、わか宮○後かくてたのもしういみじき御なかよりひかり出させ給へ